
死運び

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死運び

【Nコード】

N1197BA

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

『死運び』がこの世に出現して3年がたった。そして、人々は地下に移住した。

それ——死運びを殺すのは、『命光』。そんな命光での話。

人物紹介

西山友明……16歳。体重65?。身長163?。男

性格……明るい。しかし、能天気すぎるので、空気を読めない。

好きなもの……スタンガン・野球の軟式ボール・携帯ゲーム機

嫌いなもの……死運び・父親

備考……『命光』に入団したのは、14歳で最年少。死運びを『処分』することは2番目に上手い。

東山洋子……19歳。体重68?。身長183?。女

性格……明るいが、冷静に物事を考える。冷たい一面もある。

好きなもの……ナイフ・洋服・ピアノ

嫌いなもの……死運び・うるさい人

備考……13歳の時に命光に入団。3年のキャリアを持っているため、強い。唯一、死運びを『シヨート』させる機械——『マキナシヨーター』を持っている。

木村春樹……23歳。体重42?。身長168?。女

性格……静か。戦闘中は、性格が激変。

好きなもの……自作のノートパソコン。

嫌いなもの……死運び

備考……髪で目が隠れている。が、実際は美人らしい?

丸山明日香……23歳。体重43?。身長172?。女

性格……ムードメーカー。

好きなもの……歌。

嫌いなもの……死運び

備考……命光の仕事の間で、アイドル活動をしている人気歌手。

河西将太……15歳。体重52?。身長164?。男

性格……明るい。ヘタレ。

好きなもの……漫画

嫌いなもの……特になし

備考……主人公?

『死運び』がこの世に出現して3年がたった。

『死運び』とは、3年前に出現した、文字通り死を運ぶ——死を招く存在だ。

死運びは、もともとは普通の存在——人間だった。そう。もとは、死を招かなかつたのだ。それを実現させたのは、ローズマキナス。最凶の発明家と呼ばれている。

彼は、死体を蘇らせる——というより、無理やり動かす

ようにした。死体が腐らないように特殊加工をして、中に機械を埋め込んだのだ。よつて、機械は滑らかで柔軟な動きをできるよ

うになった。

しかし、当然政府はそれを認めなかった。もちろん遺族も。政府は忠告をしたが、マキナサスは聞かなかった。政府は、警察にマキナサスの家への異例の突入命令を下した。

マキナサスは、捕まるぐらいなら、とそれらを暴走させた。そして、その暴走の結果、マキナサスも突入した警官も全滅したのだ。

もうその時点で『死運び』は、生殖をできるように改造してあり、自在に産み落とされるようになった。『死運び』の子供は、普通の人間であるが、親の『死運び』に育てられるため、人を襲う、正真正銘の地獄が始まったのだ。

政府は対策として、「命光^{めいこう}」を作った。「命光」は、死運びを殺し、その子供を保護する仕事をする人だ。

人々は、死運びを入れないように、地下に住んでいる。しかし、それだけだと食料が足りない。だから、命光は、その食料を取る役目もあるのだった。

ノックをする音が聞こえた。

「来たか？ ほな、少し試したるで」

「友明……またやるの？ ……嫌われるわよ？」

東川洋子が、顔をしかめながら言った。

「せやな。でも、試さなあかん。洋子、手伝ってくれへんか？」

「……試す必要性は皆無」

木村春樹は、ぼつりと言う。その目は、ノートパソコンに向けられていた。

「春樹ちゃん、乗り悪いな」

春樹は、綺麗に無視した。友明は、気まずげに目をそらす。

「ふう。明日香ちゃんは？」

「可哀想よ。止めてあげたら？」

「チツ。新入り、明日香ちゃんのおかげで命拾いしたな」

「友明、皆、年上よ？ 何度も言ってるけど」

「年上やからなんやゆうねん」

春樹以外が溜息をついた。友明は、見て見ぬふりをして、携帯ゲーム機に目を落とす。そして、Aボタンを押して、ゲームを始めた。「すいませ〜ん。あの、ここって聞いたんですけど……」

「誰が対応するんや？」

「わたしがするよ」

明日香が言つて、ノブに手を掛けた。

「あ、ありがとうございます。え？ 丸山……さん？ 僕、大ファンなんです！」

「少し黙っておきいよ。新入り。あと、自己紹介ぐらい先にやりい」

「あ、はい。すみません。僕の名前は……」

将太が名前を言おうとした時、春樹の声がした。

「河西将太。15歳。身長は164で、体重は52。試験は、34だけど、実技が80。まあ、そんなに優秀でもない」

最後の一言に、将太が肩を落とした。

「少し、酷くないですか？」

将太が、拗ねたように言う。

「本当のこと」

「春樹、真実は辛いものなのよ。特に、馬鹿には」

洋子が、友明を見ながら言った。

「なんで俺を見て言うねん」

友明が口を尖らせながら言う。

「いいえ、二人に言ったのよ」

「なおさら悪いわ！ 俺に恨みでもあるん？」

「心当たりが多すぎるんじゃない？」

明日香が笑いながら言う。

「まあええわ。新入りがついていけてないで？」

「なんで、僕がそんなにめったくそに言われなくちゃあいけないんですか……」

「あゝ。もう夜やなあ。洋子、茶あシバキにいかへんか？」
「断るわ」

洋子が、そっけなく言う。

「新入り？ 緊張せえへんか？」

「いい加減に名前と呼んでいただけませんか？」

心から願うように将太が言った。

しかし、友明がその思いを砕くように、「嫌や」と言った。

「あ、皆、その角曲がったところに居るわよ」

緊張した雰囲気が出りを締め付けた。友明も例外ではなかった。

「屍は屍らしく死んでいるべき」

そう言いながら、春樹はノートパソコンで死運びの後頭部を叩いた。死運びの体液が、ノートパソコンに付く。それを、春樹は死運びの服に擦り付けて、サンマの骨を取るように死運びの心臓部の機械を抜き取った。またしても、死運びの血が春樹の手を紅く染めた。やはり春樹は、死運びの服で血を拭き取った。

「あゝ、めんどくさいわ。さつさとゲームの続きをさせてくれへんか？」

スタンガンを心臓部に当てつつ、友明が言った。

「ほな、死運びの丸焼きをつくったるで。まず、油を掛けて……」

死運びは、痺れが残っているのか動かない。

「後はスタンガンで、引火するだけや」

「ぼおっ、と。青い炎が死運びを焼き尽くした。」

「さすが春樹が改造したスタンガン……威力が半端やあらへん」

そう言つと、友明はスタンガンをポケットに入れると、携帯ゲーム機の電源を付けた。ゲーム機の起動音が、暗い雰囲気合わない陽気な音を發した。

「ごめんねっ！」

明日香は、裏券を死運びの顔に当てながら言つた。反動を利用して、肘で死運びの首筋を叩いた。

……人間なら、氣絶するんだけどなあ。

向かつてくる死運びの足に片足を引つ掛ける。死運びは、バランスを崩して、倒れた。

それを、執拗に踏み続ける。死運びの肉が焦げる。異臭。機械がショートを起こしたのだろうか。

明日香は、踏むのを止めると、他の人の戦闘を見ることにした。

洋子は、苛立ちながら言つた。

「だ・か・ら。さつさと壊さないと終わらないんだって」

「それでも！ 元は、生きていた人間なんでしょう？」

将太が、死運びを『処分』しないのだ。

「割り切りなさい。ほら」

ナイフを将太に渡す。

「……」

「ほら！ ……もう仕方ないわね」

そう言つと、洋子は将太の手を掴んだ。

「一回殺したら慣れるから」

「あゝ！ 新入り、洋子に手え繋いでもらうとる！」
空気を読めない友明の発言に、洋子は溜息をついた。

「男なら、さつさと腹をくくる！」

そう言つて、洋子は瀕死になっている死運びの胸元に、ナイフを突き刺させた。

「うわーーーーーーー！？」

将太が喚く。見ると、将太は涙を流していた。

洋子は、面倒くさい新入りが来たことに、溜息をついたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1197ba/>

死運び

2012年1月2日22時47分発行